りも見よう。千束楽など、スライドやハミリに撮り、録音をくわえて、まとまったものを作りたく思う。宇目町小野市の鷹鳥屋神社の神幸祭は秋十一月、すでに今年の計画の中に入れてある。

直川村の源六原（あるいは元祿原か）などに、古土器や石器の破片を拾う会も持ちたい。今が適期である。また個人の所蔵になる書画や刀剣、陶器などを拝見し、お話を聞く機会もつくりたい。そんなことのついでには同じ地域の産業や公共施設の見学なども併せ持ちたい。

一昨年来、行事が重っていつも困っていた第三日曜は思いきって佐伯市民歩こう会にゆずって、今年は「佐伯史談」の発行日取りと考え合せて、第四日曜を予定したい。歩こう会の動きの中に参加することも意味があり、それだけ私共も郷土を学ぶ機会が多くなるわけである。

このように考えてくると、せねばならぬことが多く大変なことになりそうである。物ずきな酔人（よっぱらい）が、趣味でやっていた、そんな時代から脱皮して、目まぐるしく変転している世相の中に、過去の歴史をちゃんとふまえ、現在を正しく把握し、今年も積極的に勉強していく意欲を燃やしたい。

そのためには、会の組織の改善、運営の方法に工夫がいるであろう。到底この私一人では出来ないことで、皆さんの協力というか、いや進んで企画なり運営なりに挺身して、指導してくれる人がほしい。会員の皆さんが、それぞれふさわしい部面を担当し、積極的に会の研修活動を推進してほしいものである。

県下には、私共の史談会と同様、あるいは似たような動きをしている団体はいくつかあろう。また佐伯地方にも、各種文化団体があり、それぞれ組織によっていろいろとやっている。その中に位して、私共は聴することなくやろうじゃないか。

私共には、過ぐる十数年の積重ねがある。何十人もの同志がある。何百人もの協力者後援者がある。態勢は出来ている。この私共の態勢で出来ないはずはない。

既に佐伯史談会は、その実績を地域社会からも認められている。これは私の思いあがりかも知れない。佐伯史談会はさらに今年はいろいろな夢を持っている。やれば必ず出来る。出来る力を持っていると確信する。これは私の妄想であろうか。

ともかくも佐伯史談会は、ユニークで実行力をもつ研究団体として、確信をもって新しい年度のスタートをきっている。大げさに言えば、百人なが驚倒するような一年になるのではあるまいか。

このような課題を、私は佐伯史談会にかけて、皆さんの賛同と協力を期待しているものである。

（おわり）

随想

今年の課題

会員　市野瀬　仁

（豊南高校勤務）

昨年の十二月十六日、佐伯史談会は定例の年末反省集会を、市内の某所で開いた。

今年一年間の反省と、来年の行事計画のアウトラインを羽柴幹事が述べた後、十余名の人達から、自由でなご

やかな雰囲気のうちに、建設的な意見が続出した。なかでも、私に強く印象づけられたのは、平川繁氏のご意見であった。

「佐伯史談会には、若い人が少なくてさびしい。以前豊南高校の生徒が、史蹟探訪によく参加したものだ。私はいいことだとかげながら思い、たのもしく感じていましたが、最近はいっこう姿を見せない。なんとかしたらどうですか。」

私は、実地研修をするには学校の時間が無理なため、郷土誌クラブを廃止しなくてはならなかった旨を述べて、代りに吟詠クラブを作ったことをつけ加えてお答えした。

一昨年のこと、佐伯市史編さんの資料をうるため、市長の一部に「文化活動にはどんな種類のものが活潑と思いますか」という調査をしたことがあった。その結果、郷土史研究と吟詠が、共に上位を占めていたことを今思い出している。

私は現在、たまたまこの二つのグループに足が出ているものであるが、奇しくも、佐伯詩道会の理事会でも、若い人が少なくてさびしい、何んとかしようではないかという意見が出たのであった。そしておのずと鋒先が（二つとも）私に向けられたのである。

なる程、この二つのグループは復古的で地味なため、一部の人に限られている点が、若者を引きつけないのではなかろうかと思ったりしている。しかし郷土史研究にしても吟詠にしても、やってみるといずれも健康的で、その興味は深く、興味はつきないものがある。

日頃若者と生活する高校教師に、人々から後継者をつくる責任を負わされることは当然のことだ。「そうだ、情熱さえあれば、方法はいくらでもある。一つ今年の課題にしよう。」とひそかに決心した。

大自然に眼を向け、歴史をふりかえる時、人間は何かを考えさせてくれる。そして、この身を山野に踏みこむ時、おのずと、詩心も湧き、朗吟もしたくなって来るのである。

——詩に興こり、礼に立ち、楽に成る。

孔子は人間の教養を、このように結んでいる。

（おわり）

（余白に）

（直川村仁田原の桜井氏から編集子宛、四国旅行の礼状あり、旅行の思い出を次の通り送って来た。前号に掲載できなかったので、ここで紹介する。読読は編集子の試み。）

四国行所感　桜井　幸

晩秋四国一周行
車中満和気談笑
展望大洋足摺険
桂浜薄暮龍馬像
高知城頭貞婦馬
醒睡大小歩危奇
琴平登階七百段
栗林周池賞古松
屋島弔源平戰趾
善通寺敬仰弘法
松山城下偲子規
行程三日溢史情

（晩秋ノ四国一周ノ行、
車中和気ニ満チテ談笑ス。
大洋ヲ展望ス　足摺ノ険、
桂浜ハ薄暮　龍馬ノ像、
高知城頭　貞婦ノ馬、
醒睡（さめり）ヲ醒（さま）マス　大小歩危ノ奇、
琴平ハ階ヲ登ル七百段、
栗林ハ池ヲ周（めぐ）リテ古松ヲ賞ス。
屋島ニ源平ノ戰趾ヲ弔イ
善通寺ニ弘法ヲ敬仰ス。
松山城下子規ヲ偲ビ、
行程三日　史情ニ溢ル。）